

日本橋の被害に関する研究

辻本研究室

5103030 金村 廣人

1. 研究目的及び背景

徳川家康が開府した慶長 8 年(1603)に、江戸の日本橋は創架された。以降、橋の周辺特に北 500m は、町人の町として日本有数の商業地に発展した。

一方で、「火事と喧嘩は江戸の華」と言われるように、江戸では、人々の生活を脅かす火災が毎年のように発生していた。そこで幕府は、さまざまな防火施策を打ち出した。しかし、江戸時代 266 年間、日本橋は 10 回被害を受けている。また江戸城、市街地においても多大な被害が発生していた。本研究は、この火災被害について、防火施策後の抑制効果等を、日本橋を中心に考察することを目的とする。

2. 研究対象・研究方法

- ①文献¹⁾を基に旧東京市日本橋区の大火²⁾、および日本橋に被害を及ぼした火災を調査した。
- ②日本橋に被害を及ぼした火災の出火点、日時、時刻、延焼範囲を「Mapinfo professional8.0」で、地図上に落とし込む。
- ③幕府が出した防火施策前後について火災の変化および、被害、江戸城の火災被害を比較し、分析をした。

3 日本橋の火災被害

3. 1 日本橋の概要

慶長8年(1603)に創架された日本橋は、長さ 37 間 4 尺 5 寸(68.6m)、幅は 4 間 2 尺 5 寸(8m)の木造橋である。高札場、晒し場など幕府の政策の重要な場所でもあり、その建設は幕府が行っている。

日本橋の周辺は、全国から商人、全国からの物流が集中する商人の町として、大型商店、大問屋が進出し、江戸城下のみならず、日本経済の中心になっていった。

また江戸時代 266 年間で日本橋は 15 回改架、6 回修理している。この改架および修理 21 回のうち、火災被害による改架は 9 回、修理は 1 回となっている。老朽化等で改架したのは 6 回で、両国橋等で見られる水害による被害の記録はない。改架の理由は、ほぼ火災が原因だったといえる。

3. 2 日本橋の被害の記録

日本橋に火災被害を与えた大火を表-1にまとめた。火災被害については、10 回全てが全焼である⁴⁾。最初に全焼したのは、明暦 3 年(1657)である。その後 60 年間で、4 回全焼している。しかしその後は、110 年間で 3 回と頻度が減少した。延焼面積は最大で約 14km²、最小で約 1km²、平均約 6.4km²となっている。また江戸時代の一般に言われている 10 大火中 6 件が、日本橋に全焼の被害をもたらしている。

図-1 に日本橋に被害を及ぼした火災の焼失範囲を示す。焼失範囲を求めるため、初めに火災の出火点を地図上に落とし、文献から具体的焼失町名、地域をプロットし、それを線で結び焼失範囲とした。図-1 より延焼方向は以下の 2 つである。

- ①南西から北東へ(2 件)
- ②北西から南東へ(8 件)

①は、延焼距離が長い。②は海によって延焼が止まるので、比較的延焼距離は短く、表-1 から、①の場合は②に比べ延焼面積が大きいことが分かる。

3. 3 発生時刻と発生月

日本橋及び日本橋区についての火災、また江戸城の火災を比較して見ると、発生月と時刻は次のようになる。図-2 から火災は 12 月～4 月にかけて多く発生している。日本橋の火災はすべてこの時期に発生し、日本橋区、江戸城についても 7 割がこの時期に発生している。①は冬の北よりの季節風、②は春の南よりの強風が大きく影響していると考えられる。同様に図-2 は、発生時刻である。江戸全域では昼間が少なく夜間に多いが、日本橋の火災は、午前 3 回、午後 4 回、深夜 3 回とばらつきがある。また日本橋区の火災、江戸城の火災についても、同様の傾向にある。

3. 4 幕府の防火施策

幕府は、明暦大火以降、江戸市街地に対し防火施策を行っている。主な施策としては、御三家屋敷を城外に移転し、江戸城の防火用の空地として使用された。武家屋敷等も本所、築地など

表-1 日本橋が被害を受けた火災概要³⁾

No.	年月日		発生時刻	出火地点	焼失面積(km ²)
	旧暦	新暦			
1	明暦 3 年正月 18・19 日	1657 年 3 月 2 日	12 時	本郷丸山本妙寺	4.748
2	天和 2 年 12 月 28 日	1683 年 1 月 25 日	14 時	駒込大圓寺	7.665
3	元禄 11 年 12 月 10 日	1699 年 1 月 10 日	20 時	石町 2 丁目(日本橋区)	2.734
4	正徳元年 12 月 11 日	1712 年 1 月 18 日	6 時	連雀町(神田区)	4.201
5	正徳 6 年正月 11 日	1716 年 2 月 4 日	6 時	湯島無縁坂(下谷池端)	7.609
6	明和 9 年 2 月 29 日	1772 年 4 月 1 日	14 時	目黒行人坂大圓寺	14.063
7	文化 3 年 3 月 4 日	1806 年 4 月 22 日	0 時	車町(芝区)	9.379
8	文政 12 年 3 月 21 日	1829 年 4 月 24 日	6 時	佐久間町(神田区)	4.384
9	弘化 3 年正月 15 日	1846 年 2 月 10 日	14 時	片町(小石川)	8.739
10	安政 5 年 11 月 15 日	1858 年 12 月 19 日	20 時	相生町(神田区)	1.206



図-1 火災範囲

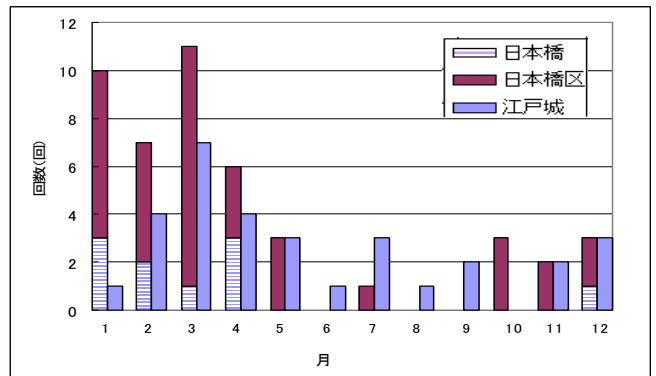


図-2 火災発生月

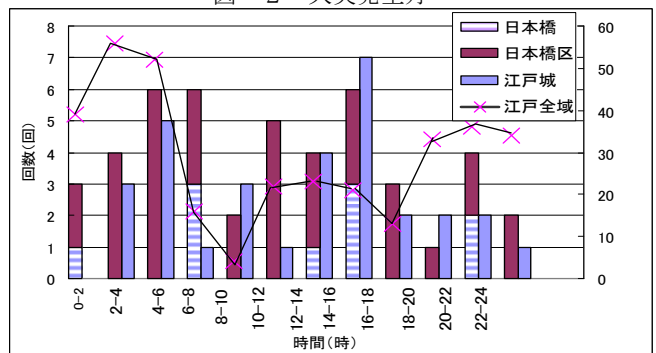


図-3 火災発生時刻

の埋立地に移転させた。また、日本橋本通りなどの道路への底の張り出し禁止、火除地の設置、火消制度の設置などが行われた。本論では、火除地の設定・火消制度について、以下に示す。

1) 火除地の設定

火除地とは、空地を利用し、火災の延焼を食い止める目的で設定され、川沿いに土手、橋詰めなどを火除地として設けていた。また江戸城を守る目的も兼ねていた。図-4の火除地は、享保8年頃までに設置された火除地である。江戸城の周辺など、北側に多く設置されているのは、火災が北側から来ることが多いためだと思われる。

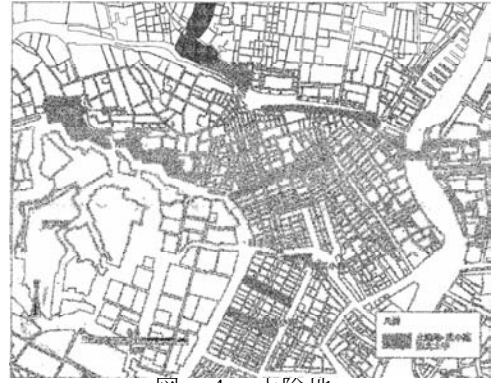


図-4 火除地

2) 火消制度

火消には以下のものがある。

- ① 奉書火消・寛永6年(1629)に設置。火災発生たびに奉書によって大名が集結するもので、時間がかかるため、効果的ではなかった。
- ② 大名火消・寛永20年(1643)に設置、16の大名を指名して作られた火消。
- ③ 定火消・明暦3年(1657)の明暦大火後に旗本4家を指名し設置。江戸4箇所(麴町、御茶ノ水、市ヶ谷、飯田橋)に常駐し、火災発生時すぐに出動していた。宝永元年(1704)に、旗本10家10箇所(駿河台、小川町、四谷門内、八代州河岸、御茶ノ水、半蔵門外、赤坂門外、飯田橋、市ヶ谷、赤坂溜池)に増加した。
- ④ 町火消・享保3年(1718)に町人による本格的な消防組織として設置。

①～③は主に、江戸城を守る目的で作られた。

3.5 火災年表の比較

日本橋と日本橋区の火災を時代順に並べた。時代区分は、火災発生頻度から、次のように分けることができる。また、御殿全焼火災発生頻度から時代区分をした江戸城と比較してみる。

- ① 第1期(1603～1657)・江戸開府から明暦大火までの期間。日本橋に被害を及ぼした火災頻度・54年に1回
- ② 第2期(1658～1716)・明暦4年(1658)から正徳6年(1716)の火災までの期間。火災頻度・約15年に一回
- ③ 第3期(1717～1806)・正徳7年(1717)から火災頻度が増加するまでの期間。火災頻度・約50年に一回
- ④ 第4期(1807～1869)・文化3年(1806)大火以降の期間。火災頻度・約20年に一回

時代区分毎に見ると、以下の特徴がある。①最も火災頻度が低く、江戸の町の拡大時期で、火災が広がる環境ではなかったと推察できる。②定火消が江戸城の北側に配置され、火除地も設置されているが、火災頻度は増加し、町人地での火災被害には、効果が少なかったと思われる。③町火消が設置された享保3年(1718)以降は、50年以上全焼していない。火災頻度から見ても、他の時代区分より少ない。町火消は江戸の全域に配置されていたことが、市街地火災に大きな貢献をあげたといえる。④第3期に比べ、頻度が増加している。大きな社会的な変化はないが、財政、治安の悪化という要因が関係していると推察される。次に江戸城の火災被害との時代区分と比較すると、日本橋と江戸城の火災で差異が表れているのは、②、③の区分である。その他は大きな差は見られない。②、③の間では、火除地、定火消の設置により、火災頻度に差が表れたものと思われる。

4 まとめ

- ・日本橋の改架は、火災が大きな要因であった。
- ・明暦3年(1657)から設置された火除地は、江戸城の防火という意味では、大きな効果はあったが、日本橋の火災に効果はなかった。
- ・定火消は江戸城の火災に対して、町火消は、市街地火災に対して抑制効果があった。

脚注

- 1)「東京市史稿・変災篇第四、第五」、「橋梁篇第一、第二」「日本橋区史」
- 2)大火の定義は記されていないが、焼失町数 25 以上の火災を、大火とした。また日本橋の被害は、日本橋の両岸が日本橋区であることから、日本橋区の火災を調査した。
- 3)延焼範囲の可視化、延焼面積を導くために使用した。
- 4)正徳6年、安政5年の火災は、変災篇では「全焼」、日本橋区史では「半焼」となっている。本論では全焼として扱う。
- 5)背景の色が異なるものは、日本橋区の火災では「日本橋の全焼火災」、江戸城では「御殿の全焼火災」である。

表-2 火災一覧表

日本橋(日本橋区)の火災				火災頻度	江戸城の火災				
旧暦	新暦	日付	日付		旧暦	新暦	日付	日付	
第1期				1603～1657	第1期				1603～1657
寛永4	9月23日	1627	10月19日		1 慶長12	9月29日	1607	10月19日	
明暦元年	9月23日	1655	10月22日		2 元和7	正月24日	1622	2月17日	
明暦2	10月16日	1656	12月11日		3 享保11	7月12日	1636	8月15日	
明暦3	12月14日	1657	2月4日		4 享保12	7月12日	1637	8月24日	
明暦4	12月28日	1658	1月26日		5 享保13	8月11日	1638	9月4日	
明暦5	12月11日	1659	1月18日		6 明暦4	正月16日	1657	3月5日	
明暦6	12月22日	1660	2月16日		7 方濟3	正月28日	1659	3月7日	
明暦7	12月11日	1661	1月18日		8 方濟4	正月20日	1661	2月19日	
明暦8	12月22日	1662	2月16日		9 寛永12	2月12日	1635	3月24日	
第2期				1658～1716	第2期				1658～1837
享保8	2月20日	1668	3月13日		10 寛永8	2月6日	1668	3月18日	
享保9	2月20日	1669	3月13日		11 享保2	正月20日	1657	3月14日	
享保10	2月4～6日	1669	3月20日		12 享保9	正月28日	1724	2月24日	
享保11	2月14日	1670	3月7日		13 享保16	4月15日	1731	5月20日	
享保12	2月29日	1671	3月22日		14 享保17	3月28日	1732	4月22日	
享保13	2月12日	1672	3月5日		15 享保4	4月16日	1747	5月24日	
享保14	2月7日	1673	3月1日		16	4月23日	1747	5月31日	
享保15	2月29日	1674	3月22日		17	4月23日	1747	5月31日	
享保16	2月14日	1675	3月7日		18 明和1	2月20日	1764	3月22日	
第3期				1717～1806	第3期				1806～1867
享保17	2月14日	1675	3月7日		19 明和5	6月17日	1768	7月29日	
享保18	2月29日	1676	3月22日		20 明和9	2月29日	1772	4月11日	
享保19	2月12日	1677	3月5日		21 天明6	1月27日	1786	2月25日	
享保20	2月29日	1678	3月22日		22 寛政8	1月10日	1794	2月9日	
享保21	2月14日	1679	3月7日		23 文化3	3月4日	1806	4月22日	
享保22	2月29日	1680	3月22日		24 天保5	2月10日	1834	3月16日	
享保23	2月14日	1681	3月7日		25 天保9	10月10日	1838	11月4日	
享保24	2月29日	1682	3月22日		26 天保15	5月10日	1844	6月29日	
享保25	2月14日	1683	3月7日		27 享保5	正月28日	1657	3月14日	
第4期				1806～1867	第3期				838～
享保26	2月29日	1684	3月22日		28 享保5	正月28日	1657	3月14日	
享保27	2月14日	1685	3月7日		29 安永10	10月17日	1839	11月11日	
享保28	2月29日	1686	3月22日		30 文久3	6月3日	1863	7月13日	
享保29	2月14日	1687	3月7日		31 文久3	11月15日	1863	12月25日	
享保30	2月29日	1688	3月22日		32 文久3	11月15日	1863	12月25日	
享保31	2月14日	1689	3月7日		33 文久3	11月15日	1863	12月25日	
享保32	2月29日	1690	3月22日		34 文久3	11月15日	1863	12月25日	
享保33	2月14日	1691	3月7日		35 文久3	11月15日	1863	12月25日	
享保34	2月29日	1692	3月22日		36 文久3	11月15日	1863	12月25日	

参考文献

- 1) 東京市:「東京市史稿変災篇第四・第五」1917、「橋梁篇第一、第二」1936、「市街篇」1914、「産業篇」1935、2) 西田幸夫:「江戸東京の火災被害に関する研究」2003、3) 日本橋区:「日本橋区史」1916、4) 浦野正樹他:「復興コミュニティ入門」2007 弘文堂、5) 岸井良栄衛:「江戸・町づくし稿上巻、中巻、下巻、別巻」2003 青蛙房、6) 西山松乃助:「江戸町人の研究第5巻」2006 吉川弘文館、7) 東京消防庁:「江戸の火消 <http://www.tfd.metro.tokyo.jp/libr/times/times01.html>」2006